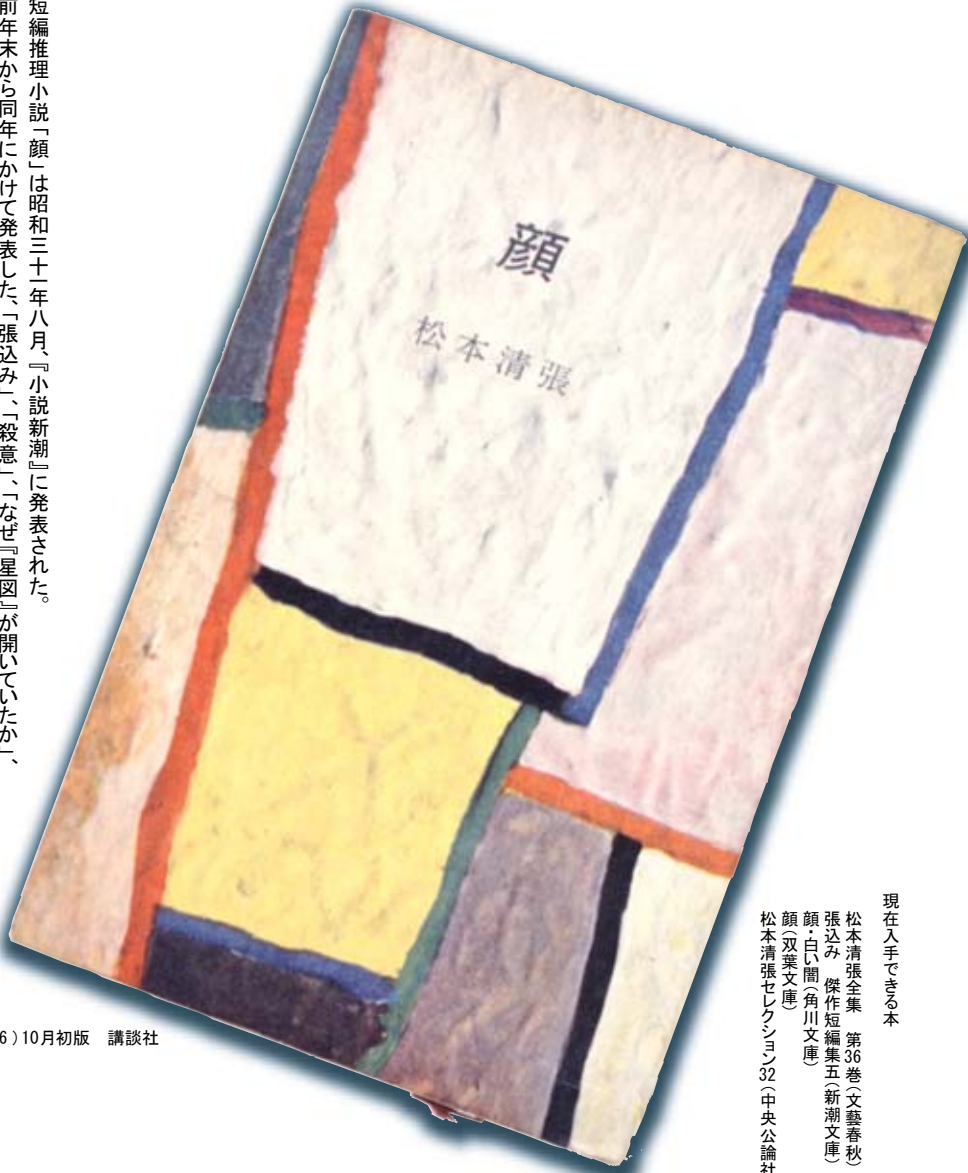


# 松本清張記念館

◆館報◆

2001. 3  
第6号

## 彼は必ず観る！



現在入手できる本

松本清張全集 第36巻(文藝春秋)  
張込み(傑作短編集五(新潮文庫))  
顔・白い闇(角川文庫)  
顔(双葉文庫)  
松本清張セレクション32(中央公論社)

短編推理小説「顔」は昭和三十年八月、『小説新潮』に発表された。前年末から同年にかけて発表した、「張込み」、「殺意」、「なぜ」「星図」が開いていたが、「反射」、「市長死す」と合わせて昭和三十一年十月に刊行されたのが、表紙の単行本『顔』(講談社刊)である。これらの短編に、昭和三十一年度の第十回日本探偵作家クラブ賞が授与された。「顔」は清張作品として、初めて映画化(昭和三十一年・松竹)された作品でもある。

昭和31年(1956)10月初版 講談社

### 作品紹介

主人公の井野良吉は新劇団の団員である。無名ながら、映画で重要な役に抜擢される。幸運が舞いおりたのだ。名声も金も手に入る。有名になれば仕事もふえ、多くの場面に「顔」が出るだろう。そうならば、スクリーンのこの顔は、きつとあの男の目にとまる。希望にふくらむ胸をある冷たい不安が騒がせた。

井野には、消しざりた過去があった。北九州・八幡市にいた八年前、ミヤ子という女を絞殺し山中に遺棄した。妊娠した女が邪魔になったのだ。ところがその殺人行の途中、汽車の中で女と一緒のところを、あの男に見られた。目撃者の名は、石岡貞三郎。ミヤ子の勤める大衆酒場の客だった。

上京し、八年間は何事もなく過ぎた。今、俳優として成功の階段を登りはじめている。が、石岡にこの「顔」を見られたら、のし上がったとたんに、破滅だ。井野は「賭」を決心した。目撃者には消えてもらう。石岡に手紙を出して京都に誘いだし、殺す計画を立てるが……京都での「対決」は意外な展開をみせ、肩すかしたに終わる。映画は完成し、井野の「特色ある好演」は賞賛される。また「成功の階段を登った。井野がそう喜んだとき、皮肉などどんでん返しがまっていた。

(学芸担当 中川 里志)

### 目次

- 平成十二年度市民文芸講座……………2
- 講演会……………4
- 展示品紹介……………5
- 探検！清張記念館……………5
- みんなの広場……………6
- お知らせ……………7
- 北九州文学マップ……………7
- トビックス……………8

3月12日(月)



## 「清張はミステリー界の『一人の芭蕉』だった」

文芸評論家 安間隆次氏

### アリバイの必然性

たとえば、テレビの番組で、いわゆる「アリバイ破り」というのがある。事件を追う弁護士や刑事が、時刻表を一生懸命に繰りながら、容疑者のアリバイを崩していく。それは往々にして、追う側の必然性ばかりで、その犯人がそんなアリバイを組み立てることが可能であるか、というところは抜け落ちてしまっている。追う側の必然性だけで、追われる側の必然性として書き込まれることがほとんどない、という問題があるわけですね。

つまりアリバイ破りは重要な要素なんですけど、では「点と線」ではどうでしょうか。安田という容疑者がいて、その奥さんの安田亮子が浮上してくる。この人は体が弱くて療養中のため、時刻表を読むのが唯一の趣味です。ですから、「ああ、ああい人物が追われる側にいたために、ああい綿密なアリバイを組み立てることが可能なんだな」というふうに、読者を納得せしめることができる。追われる側の必然性、というものが非常に強固に、見事に出せているかな、という気がするわけです。

### 「一人の芭蕉」としての清張

「点と線」の面白さは、まず、偽装情死の裏側の非現実的な女性の企みを、きわめて日常的な感覚を持つ刑事が崩していくというところにあります。その中に、大変複雑な形のアリバイ、飛行機と列車を組み合わせたトリックをちゃんと埋め込んである。登場してくるそれぞれの人間がきちっと人間として描き込まれ、さらにミステリーの面白さが溶かし込んである。

ボオは近代推理小説の始祖でした。「点と線」ができるまでずっと、そのボオで終わっているのか、このとき、人間の常識とか日常的な感覚を無視したような推理小説が、はい作られてきたわけです。荒正人さんという文芸評論家が、「点と線」を書いた松本清張こそは、「一人の芭蕉」であった、と言っています。つまり、卑俗な、ある種駄洒落みたいな要素を含んでいた俳句を、大変わかりやすく、しかも深い文学性を持ったものにまで高めた芭蕉のように、清張もまた、ミステリーが本来そなえもつ謎解きの面白さと、深い人間観察に基づく高度の文学性を融合させ、見事に、現実感あふれる新風を生んだと。ミステリーの好きな読者であろうと、ミステリーを読んだことのないような読者であろうと、いっぺんに気持ちをつかんでしまった、というようなことを言っているわけですね。

3月13日(火)



## 「黒のトライアングル」

梅光学院大学教授 小林慎也氏

### 「線」から「面」へ

「点と線」は社会派推理小説の嚆矢とされる作品ですが、ここでは「社会」の部分をも、具体的な汚職事件に限ってお話したいと思います。汚職というのは政界、官界(行政)、財界・業界の三つの間の不正・不法な関係(贈収賄)を指し、トライアングルの典型的な構図になるわけです。

「点と線」は汚職、疑獄を初めて取り上げた作品です。業者と上級官僚が犯罪を隠すために中間管理職の官僚を心中に見せかけて殺すという事件で、それ以外に、時間表や交通機関を使うトリックに新機軸が見られ、汚職を正面から扱ったように見えません。ただ、それでも、社会とそこで正当に評価されない個人という二項対立の関係を主に書いてきた松本清張が、初めて複雑な社会機構や社会構造が生み出す犯罪に目を向けるきっかけになった作品として意味を持つと思われれます。タイトルの「点」から「線」へ、「線」から「面」へ、さらに複雑な社会構造へと対象が広がったのです。

### 「点と線」以降

なぜ、松本清張は汚職に関心を持ったのか。直接的には、昭和電工疑獄、造船疑獄など実際に汚職事件が頻発していたこと、国家犯罪の陰で個人が犠牲になっていること、があげられます。

「点と線」のすぐあと、輸入砂糖事件をモデルに「ある小官僚の抹殺」を書き、「日本の黒い霧」(昭三十五)、「現代官僚論」(同三十八)と発表しています。それらが、推理小説のかたちから、ノンフィクション、論究とジャンルが広がっていることにも注目しなければなりません。汚職や政界、官界、財界の癒着や腐敗は現在のKSD事件や機密費横領まで綿々と続いているのを見ても、この作品の先見性がうかがえます。

松本清張自身が、才能を持っているのに社会に認められないという、人間と社会全体のゆがみやずれなどをテーマにしてきた作家でした。それがこの「点と線」以降、社会というものの構造にも目を向ける方向にすすんでいく。社会を見据えた推理小説を書き続ける一方で、ノンフィクションという形で、日本の現実をもう一回別の目から見直すというテーマ設定になって行く。日本の近代以降の官僚主導型の政治が生み出してきた闇のトライアングルが、国民のために果たしてなっているのかどうか、という問いをずっと問い続けてきた作家ではないかと思えます。

# 市民

松本清張記念館では、毎年「市民文芸講座」を開講しています。今回のテーマは、現在開催中の企画展にちなみ「点と線」でした。四日間にわたり、四人の先生方にそれぞれの視点からの講義をお願いしました。その中から一部をご紹介します。

香椎と清張

レジュメの一番はじめを見てください。「舞台再訪」『点と線』。これは一九七三年に朝日新聞に連載したもので、「私のもの見方考え方」という本の中にあります。

『…私はその舞台を前に行ったことのある福岡県の香椎海岸に選んだ。私が博多にしばらくいたのは昭和四、五年のころだった。…清張さんは勘違いをしまして、年譜を見ると、昭和四、五年のころはまだ小倉で印刷の勉強をしているんです。だぶん経つてから、博多の嶋井オフェットという印刷工場で、オフセットの稽古をしています。その間に知り合ったのが、(館報第五号を示して)ここに出てくる西島さん。西島さんによると、「香椎と一緒に野球を見に行ったりなんかした」って言うんですね。

皆さんの大部分は「存じないでしょうが、昔は香椎に球場がありました。香椎球場がどこにあったかということを調べましたら、昭和十四年にチーリップの園として「かしかえん」が開園された中に、球場があったそうです。今はありませんが。

香椎もずいぶん変わりました。西鉄の香椎からJRの香椎まで、小説の中では六分て言いますが、今ではとても行けません。

まぼろしの「陽炎」

ここからは、清張さんの本になっていない小説の話をしていきます。福岡県警が、「暁鐘」という機関誌を出している。大正十四年にできて、戦時中に休刊になって、昭和二十一年の七月にまた再開しているんですが、昭和二十五年に清張さんが「陽炎」という小説を発表しているんです。

これを世話したのが、中村光至さん。県下の「九州文学」では、かなり有名な人だった。この人が、清張さんに小説を書かせたんです。中村さんはあまりそのことを語りませんが、

この「陽炎」は、昭和二十六年の十月に出たんですけど、なにしろ警察の雑誌ですから、まったく一般の方は見えていない。それから、本人の意思でしようか、清張さんの年譜には全く欠けているんですよ。「陽炎」が、しかし、「西郷札」と「或る『小倉日記』伝」のあいだの小説ですから、これはやはり注目すべきだろうと思います。

私は一種の習作を中村さんが認めたということ、これは非常に大したものだと思っています。やはり名馬がいてもいい伯楽がいないと、世の中には出られませんから。



3月15日(木)

『点と線』とその時代

北九州市立大学教授 赤塚正幸氏

「あさかぜ」という情報

「点と線」は時間をトリックに使った作品です。

時間を操作する小道具は、ひとつは電話・電報で、もう一つが、交通機関の特急あさかぜや飛行機です。あさかぜは大変重要なポイントとして作品の中に登場し、容疑者のアリバイを作るために利用されています。一番典型的な例が、「点と線」の事件の陰の主役で、計画を立案したと目される安田の妻の立てた計画です。病気でほとんど寝たきりの彼女は時刻表が好きなんです。たとえばいまこの時間、鹿児島本線のどこにどの列車が走っているか、あるいはどの駅に止まっているんだらうと空想する。しかしこの、安田の妻が想像している列車は、彼女の空想の中に現れた列車ではない。おなじ列車であっても、人間を運ぶ道具としての列車と、いつてみればその、時刻表の上の数字ではない列車というのがあるんです。

その、想像の列車の持つ意味とは一体何か。へ実際に人間を運ぶという機能よりも、何時にどこにいるという、いわば「列車自体が一つの情報」であるということです。そして列車が「情報である」という意味が重要になっているのです。

情報化時代の先取り

「点と線」では、列車を単に「人間を運ぶ道具」としてじゃなくて、へそこからいろんな情報を導き出すもの、あるいは「情報を運ぶもの」(情報を運ぶ)を入れておくものとして見えています。松本清張は、あさかぜという特急列車(が)一つのメディアであるという意味を発見した。その発見が、例えば時刻表を使った時間のトリックに結びついているんですね。列車とか飛行機に、単に人間を運ぶ道具としての意味しか見ていなかったら、「点と線」やあるいは「時間の習俗」というような作品はもうろん生まれてこなかった。どこまで自覚的だったかはわかりませんが、列車や飛行機が、情報の入れ物、情報を運ぶ装置や仕掛けなんだという意味をつかまえて、「点と線」を作っています。

現在、情報化ということが言われていますが、これは、なにもインターネットがどつどつというのではなく、世の中のいろんな動きやモノの意味を、情報という視点から見るといえることです。そういう点で「点と線」は、現代の情報化時代を先取りした作品だといえるでしょう。

松本清張記念館友の会設立記念

## 『新藤兼人講演会』

1月27日

会場 北九州市立女性センター ムーブ

『ゼロの焦点』など松本清張作品の脚本を手掛けた映画監督新藤兼人氏の講演会が、雨天の中、定員いっぱい約五百名の聴衆を迎えて行われました。

講演時間の一時半、椅子も使わず力強く講演する様子は年齢(八十八)を感じさせないエネルギーで、清張に相通じるものを感じさせました。

「小説家は自分は罪を犯している、それを告白するのだ」という感じがする。ところが清張さんは警察の人みたいに見えるし、建築関係たたいにも感じるし、飲食街で肩をはって歩く人のようにも見えた」と、清張の印象を語り、会場を沸かせながら、「清張作品の下地は苦労した前半生にある、作家としての原動力は小倉の少年時代に培われた根性だ」と語りました。

そして、同じ時代を生きた表現者の証言として、「占領下の奇怪な事件(松川事件)におけるアメリカの影を、当時の誰もが感じながら口に出来ないでいた。その中で松本清張が体を張って書いた」と、その勇気を称えられました。

「記念館の帰り際、雨の中、傘を差し、記念館を見つめて、清張さん、あなたの仕事は実ったねという感じがしました」と最後に締めくくりに、盛大な拍手で終わりました。



## 「松本清張は何をしたのか」

新藤 兼人

山口銀行文化講演会(松本清張記念館友の会協力)

藤井 康栄

2月16日

会場 東京第一ホテル小倉

「本しか作ることがない」と語る館長が、松本清張記念館の展示、映像ソフトをどのような視点で作ったかという導入から、文藝春秋編集者としてみた清張像について「松本清張の残像」常設展示室2で放映、時間十五分に説明を加える形で講演を行いました。①自分の原稿の感想を求める②すぐ知りたい③取材の喜び④作家が巨人であり得た時代、それぞれのエピソードとヨーロッパ取材旅行の様子を語りました。



特別企画展「点と線のころ」開催記念講演会

『点と線』のころの鉄道事情 浅川 公生

3月10日

会場 北九州市立商工貿易会館

鉄道ジャーナリストの浅川公生氏が、「点と線」で登場した寝台特急「あさかぜ」について、時代背景を交え講演しました。「あさかぜ」は当時の躍動する世相を象徴する列車であった。「戦後初の夜行列車で当時の九州では悲願だった東京への直行列車。九州出身の清張が作品に登場させたのも当然」と語りました。



# 灰皿



松本清張がヘビースモーカー、いやチーンスモーカー(絶え間なくたばこを吸う人)だったことは知られている。書齋の絨毯には、たばこの灰によって焼け焦げた跡がいくつもあつた。思索や創作に熱中するあまり、灰が落ちるのにもかまわなかったのだという。

机の右手には、白地に朱の花弁が鮮やかな灰皿が置いてある。案外きれいなのは、そこに必ずしも灰が落ちていなかったことを示すのだろうか。雑然とした机の上に、滑らかな肌を見せるその十三代今泉今右衛門の「花絵丸灰皿」だけがやけに凜として映る。決してブランドの信奉者ではなかった清張だが、愛用品の中でこだわりの逸品のひとつであろう。

清張が(今右衛門)を愛用したのは、その美しさはもちろんだが、陶磁器に受け継がれた歴史への興味と、郷

土への愛着があつたようだ。「半生の記」に「鶴」という章がある。「この鳥は、かつて京城の医務室の前でもたひたひ見たもので、佐賀地方では力チカラスと呼び、普通のガラスとは異なつた啼き方をすする」。夫人の出身地が佐賀県であつたため、戦争中、家族を疎開させて出征した。鶴は清張の心象風景において佐賀と朝鮮とを結ぶシンボルなのだ。夫人の故郷は、邪馬台国論争を巻き起こした吉野ケ里遺跡のある神埼郡である。今右衛門窯がある有田町は、そこからずっと西にあたる。清張は「色鍋島」と今右衛門さんのこと(昭和五十四年『人間国宝』シリーズ

講談社)の中で、陶磁器の歴史に思いを巡らす。「朝鮮出兵は、結果的に失敗に終わったが、かの地から陶工を多数つれ帰つたことは、わが国の陶磁界に革命的ともいえる大きな影響を与えた」。この手法は秘密に守られ、それにまつわる様々なミステリーが伝えられる。「これらのことは興味をそそる材料ではあるが、謎と伝統に綾織られながら、今泉家によつて今日なお生きつづけている『色鍋島』には、無限に拡大され、そして点に凝結された美の魅力がある。その魅力が、私を今泉今右衛門窯へと引き寄せたのかもしれない」。

伝統の中に近代的な美を顕わす十三代今右衛門の作品を手に取りながら、清張は過去に、そして異国から異国へとわたる陶磁の道に、思いを馳せたであらうか。

(学芸担当 柳原 暁子)

## 老よしとハルコの探検! 清張記念館

### “1F 常設展示室2のBGM”の巻

**きよし** さっき常設展示室で流れてた曲がミュージアムショップで売ってる。なにになに? 「Eternal Quest(終わりになき探求)」。まるで清張のためにあるような曲だな。

**ハルコ** それもそのはず、記念館のオリジナルですって。作曲・プロデュース・演奏は、ピアノ奏者で作曲家の谷川賢作氏。あの詩人の谷川俊太郎氏の息子さんよ。なんでも、館の雰囲気曲にしようとして完成するまで何度も足を運んだそうよ。



◀BIF  
ミュージアムショップでも好評発売中

※谷川賢作氏は、映画音楽ほか、父子で音楽と詩の朗読のコンサートを全国で行うなど、幅広く活躍中。北九州市に身近なところでは、なんと、スペースワールドのCD シングル「スペースワールド ソングブック」なども手掛けています。

**きよし** そう思って聴いてみると、骨太な清張作品に大人のムード漂うジャズって、けっこういいねえ。それにしても、ジャズを聴くとお酒を飲みたくならない?

**ハルコ** もう、昼間っから。清張は甘党でお酒はほとんど飲まなかったそうよ。コーヒーは大好きだったそうだから、この曲のとくぐらいコーヒーにしなさい!

あくなき探求心の作家・清張にふさわしい、こだわりのBGM は当館だけのオリジナル。ご自宅でのんびりこのCD を流しながら、好きな作品を読み返してみるとまた新たな世界が広がってくるかも。

CD は、館内の写真集になっているブックレット式のジャケットに入って、地下1階のミュージアムショップで好評発売中(税別 2500円)です。

## 「清張作品を読んで考えたこと」

# みんなの広場

苦勞して子育てしている時、子供は勉強私は松本さんの本を読んでいた。おかげ様で子供は、本が好きになりました。(50才代 大阪 女)

私の小中教師の仕事の柱に、子供に真実とは何か、社会を正しく見る目を育てることがありますが、それに一番大きな力になったのは、清張の物の見方です。(60才代 山形 男)

40才後半 より50才代 にかけて沢山の本を読ませていただきました。当時は勤めもあり(小学校教師)何かと忙しい日々でしたが寸暇を惜しんで読みました。この沢山の本により人間として大切なこと、考えなければならないことなど色々勉強になりました。今は、昔読んだ本をとり出し繰り返し読んでおります。

(70才代 愛知 女)

松本清張は全ての自分の原点です。彼のおかげで、文学好き、旅好き、映画好き、歴史好きになりました。中学生の時代に氏の小説に出会ってなかったら、つまらない人生を送っていたと思います。

(30才代 群馬 男)

高校の物理の授業中は必ず清張の小説に没頭していました。文庫本を教科書の手前に隠しておいて読むならまだしも、図書館で借りたハードカバーの『火の路』を堂々と開いていたのです。もともと古代史に興味があったので彼の作品のいくつかは私の関心をもっと広げたり深めたりしてくれました。改めて読もうかなと思います。

(40才代 神奈川 女)

18才の頃から、日本の古代史に興味を持ち、「天皇とは何か、なぜ天皇陛下のために死ななければならないのか」を考えましたが、よく分かりませんでした。神戸の和田岬にある造船所へ勤めていましたので、昭和20年の大空襲では、逃げ惑う市民や路傍に散乱している死骸を目の当たりに眺め、また毎日艦載機の攻撃を避けながら、「今日は無事に須磨の寮へ帰れるだろうか」と思いつつ、徒歩で通勤しました。やがて、軍隊にはいり、満州へ向かう途中、玄海灘を前にして、これでやっとお国のために死ねると考えました。しかし、「天皇陛下のために」という気持はなくなり、「可哀相な国民のために」死んでもよいと覚悟を決めていました。大正生まれの私たちは、みんな同じような運命でした。

大学で、日本史を学びましたが、「神代」がなくなっただけでした。昭和60年頃に、清張先生の「清張通史」6巻を読みましたが、これが真実であるとは考えにくい思いでした。その後、司馬遼太郎先生の「司馬史観」を読んでから、はじめて日本の古代史の真実が見えはじめました。そこで、あらためて「清張通史」を読み直して愕然としました。先生は、古代の真実の歴史を、具体的に、かつ、精密に証明されています。これは、多くの学者の誰よりも優れた立派なものです。奥深い推理小説とともに、先生を大変尊敬しております。

学校で教え、多数の日本人が理解している日本史は、支配者により粉飾されたものであることが、はっきり分かりました。私の父が、教員として朝鮮へ赴任したため、私はソウル付近で生まれ、朝鮮語を習い、朝鮮人を友として16年間育ちました。そのせいもあって、彼等との関係を大切にしなければならないと今更ながら痛感するのです。

(香川 男)

### 編集部より

今回は少し長い感想を掲載しました。たくさんのご意見、ありがとうございます。すべてを掲載出来ないため、次回もテーマで募集します。お寄せいただいた方の年齢の幅の広さに、今さらながら驚いています。今後とも、みなさまのご意見ご感想、お待ちしております。

第5回テーマは、

## 「清張作品を読んで考えたこと」

## 「わたしを変えたこの一冊」

読後の感想や、読んだ当時のこと、また自分の人生に清張作品がどう影響を与えたか、何を考えさせられたかなど、みなさんの声をお待ちしています。

アンケートは館内にも置いています。お答えいただいた方の中から5名様に記念館オリジナルグッズをさしあげます。

「みんなの広場」係まで

# 松本清張記念館 友の会 会員募集中!

3月中旬で会員480名になりました。  
事業も毎月のように行っています。  
皆様のご参加をお待ちしています。

●お知らせ●

## ● 今後の主な事業 ●

4月下旬	市内文学散歩 友の会だより「春号」発行
5月	読書会
6月	文学館見学会
7月	友の会だより「夏号」発行
8月	年次総会

## ● 会員の特典 ●

- 常設展の招待券(年間4枚)進呈  
及び企画展(年2回)のご招待
- 記念館主催事業(読書会、文芸講座等)の  
案内・参加
- 記念館広報誌(館報)・企画展図録の送付
- 友の会主催事業の案内、会報の送付
- 友の会オリジナルグッズ(ペーパーウェイト)の  
進呈(加入年度のみ)
- 喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金の1割引

お問い合わせは記念館内友の会事務局まで

# 清張作品初のアニメ化「点と線」完成 一般公開迫る!

記念館オリジナル映像ソフト「点と線」が完成しました。「昭和史発掘」や「天保図録」など清張作品の挿絵を多数手がけられた風間完画伯の原画(下)を元に、デジタル技術を駆使してアニメ化した、まったく新しい「点と線」です。

原作のもつ昭和30年代の雰囲気をも忠実に再現。主人公の鳥飼刑事の声は俳優・西田敏行氏、三原警部補の声は俳優・緒形直人氏が演じています。映像の美しさとともに、推理小説本来の面白さを十分堪能いただけます。

8月4日、開館3周年記念の日より、記念館内「推理劇場」で一般公開されます。



## 北九州文学マップ

文学的巨人のまち小倉

## 森鷗外

森鷗外が陸軍第十二師団の軍医部長として小倉に滞在したのが、今からおよそ一世紀前の明治三十二年(一九〇〇)六月から同三十五年(一九〇二)三月までの二年九ヶ月。この間、公務のかたわら講演会や新聞への寄稿、旧跡調査などに励み、この地に大いなる文化的遺産を残した。そして半世紀後、鷗外の撒いた種は見事に開花した。昭和二十八年(一九五三)松本清張は、失われた鷗外の小倉日記を題材にした「或る『小倉日記』伝」で第二十八回芥川賞を受賞、清張にとって鷗外は生涯の文学的テーマとなった。遺作「兩像森鷗外」の中で語られる鷗外像は清張が自らを語っているかのようにこの二人は似ている。半世紀の時を経て再

び文学的巨人が小倉に出現したのである。鷗外の鍛冶町時代の住居「史跡森鷗外旧居」で当時の暮らしぶりを偲ぶことができる。  
(藤澤 隆文)



### ① 森鷗外京町住居跡碑

### ② 史跡森鷗外旧居

所在地 / 〒802-0004 北九州市小倉北区鍛冶町1丁目7-2  
TEL・FAX / 093-531-1604  
時間 / 10時～16時30分  
休館日 / 月曜日及び祝日、年末年始  
(月曜日が祝日の場合は翌日も休館)  
入館料 / 無料

「史跡森鷗外旧居」として保存・公開されている。





研究誌『松本清張研究』  
第2号発行 定価二〇〇〇円

『松本清張研究』は、全国の第一線研究者を網羅し、さらなる研究の推進と後継者の育成をめざして、年一回、記念館で発行する研究誌です。

大正時代の小倉と清張

特集 松本清張と菊池寛

座談会 松本清張と菊池寛 井上ひさし、平岡敏夫、「司会」山田有策

ミステリーの自覚 菊池・芥川の地層と清張

「形影」 菊池寛と佐佐木茂素論 人間の興味の小説

反制度の継承 松本清張と菊池寛の「メディア」と「読者」

「小説研究十六講」から「小説研究十六講」へ 菊池寛 木村毅 松本清張

〈講演再録〉菊池寛の文学

小林安司

藤井淑楨

片山宏行

小笠原賢二

石川 巧

松本清張

天沢退二郎

高橋敏夫

仲正昌樹

曾根博義

木股知史

宮田穂栄

飯島耕一

衛藤吉則

高橋和夫

『神々の乱心』論「未完」の魔界譚として  
松本清張は「最高のホラー作家」か？  
—「解決不可能性」の時代がもたらしたもの—

清張と歴史教育 『落差』のアクチュアリティ

松本清張と文壇 大岡昇平の「松本清張批判」をめぐって

松本清張の短編技法

松本清張の仮想敵 全集「日本の文学」をめぐって

すぐれた戦後文学 『黒い福音』を再読して

「折字館事件」(『小説東京帝国大学』) 解読にみる清張の視座と葛藤  
—「史的事実の叙述」と「想像による描写」のはざま—

エッセイ『火の路』の旅 I

記念館研究ノート

『点と線』—ノンフィクションへのプロローグ

〈資料研究〉「点と線」(原稿・雑誌・単行本全集)の校異について

企画展「清張文学の土壌 大正期の小倉」を終えて  
記念館だより

● 編集後記 ●

暖かく、過ごしやすくなりました。季節の移り変わりから、歳月の早さを感じます。この館報も6号となり、記念館も8月で閉館3周年になります。

これまでご来館いただいた方、友の会、そして研究者、皆様と記念館を繋ぐかけ橋として、一層充実した館報にしたいと考えています。これからもよろしくお願いします。

(大西 政寛)

好評発売中

お申し込みは記念館へ



創刊号

定価一五〇〇円

◎特集 清張と鷗外  
森鷗外と松本清張／平岡敏夫  
開館周年記念シンポジウム  
(松本清張として鷗外とは) 小倉郷土会と松本清張／小林安司  
流論へのまなざし／宗像和重



創刊準備号

定価五〇〇円

松本清張研究について／平岡敏夫  
歌と石と植物と／山田有策  
『天城越え』は「伊豆の踊子」を  
どう超えたか／藤井淑楨



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093(582)2761  
FAX 093(562)2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 (有)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス J R: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
バス: 小倉北警察署前/NHK前下車  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

